

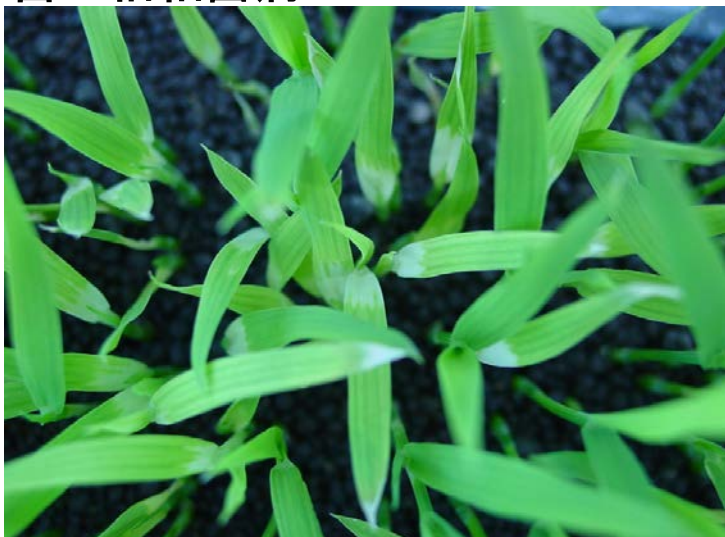
水稻の苗立枯病と苗立枯細菌病・褐条病の特徴・見分け方について

苗立枯病と種子伝染細菌病（苗立枯細菌病・褐条病）は、いずれも育苗中に発生し、苗の立ち枯れ症状を起こしますが、それぞれの病害で発生原因や、特徴となる症状は異なります。

		病原菌	地際部のカビの有無	特徴となる症状	多発条件
苗立枯病		フザリウム （カビ）	あり 地際部・根に 白～淡紅色のカビ	いずれも生育不良 しおれ・枯死	緑化期の低温、過湿 ・高pH(5.5以上)
		リゾープス （カビ）	あり マット苗表面が 白いカビで覆われる		出芽時の高温多湿
		トリコデルマ （カビ）	あり 白→青緑色のカビが密生 （ペーパーポットで多）		低pH(4.0以下)
		ピシウム （カビ）	なし カビは見えない	育苗後半に坪状に赤茶けて 急激にしおれる（ムレ苗）	緑化期の低温・過湿 ・高pH(5.5以上)
種子伝染性 細菌病	苗立枯 細菌病	バークホルテリア （細菌）	なし	葉身基部の白～黄白化 →のちに針状となり乾燥枯死 坪状～箱全体に発生 （育苗箱内で伝染する）	出芽～育苗初期の 高温・多湿
	褐条病	アクトボラックス （細菌）	なし	葉鞘～葉身に褐色の条線 育苗箱内で散在	循環式催芽器による催芽 （食酢未使用） 育苗初期の高温・多湿

- ・苗立枯病は、カビによる病害です。土壌伝染の他、灌水で持ち込まれる場合もあります。苗の生育が不順な時に発生しやすくなります。
- ・ピシウムによる苗立枯病は、他の菌とは異なり、地際部にカビが発生しているのが見えません。
低温や日照不足で苗が弱った状態で、急に温度が上がった場合に発生しやすく、育苗後半に坪状に赤茶けて急激にしおれます。
- ・苗立枯細菌病は、葉身基部の白～黄白化が最大の特徴です。育苗箱内で伝染するため、坪状に発生します。
根の生育が著しく抑制され、生育不良、マット形成不良となります。最終的には針状となり立ち枯れます。
- ・褐条病は、葉鞘、葉身の褐色の条線が特徴です（葉身の条線は、必ず葉鞘部からつながっています）。激しいと腰曲がり症状（転び苗）となります。
発生が早いと枯死に至ります。育苗箱内ではあまり伝染しないので、散在します。

苗立枯細菌病

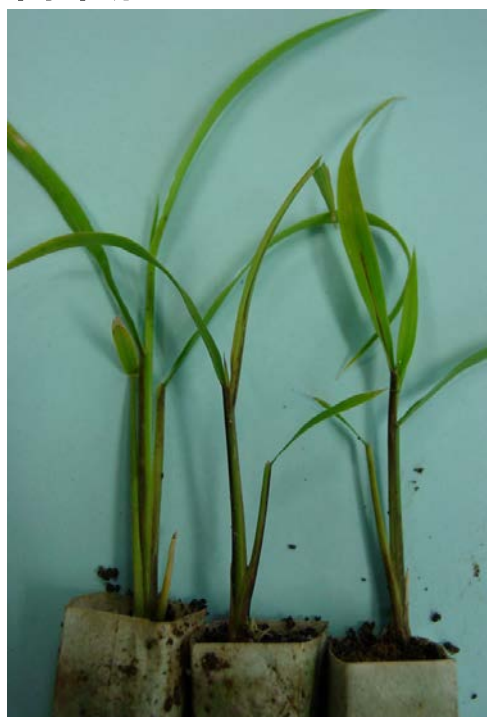


↑
葉身基部が白化するのが最大の特徴

やがて針状になり枯死に至る →
僅かに生き残っている葉には白化した部分が残る



褐条病



葉鞘～葉身に褐色の条線

ピシウムによる苗立枯病



← 育苗初期の症状。
床土や地際にカビは見えない。



← ムレ苗症状
地際部がやや淡く褐変し
水浸状となる

苗立枯細菌のような
葉身基部の白化症状はない



← 生育後半の立ち枯れ症状。
赤茶けて急激にしおれる。

トリコデルマによる苗立枯病



ペーパーポット栽培で発生しやすい。
培土の表面に、最初白色の菌糸塊、その後青緑色の胞子塊が見られる。

リゾープスによる苗立枯病



苗箱の一部または全面が白いカビで覆われ、やがて灰白色となる。
出芽前に立枯れ、出芽不良も起こす。